

第 122 回 日本方言研究会 研究発表会報告

(博士後期課程 高橋新)

報告の概要

- ・研究発表会の日時: 2026 年 5 月 22 日 (金) 9:00～
- ・発表会の開催場所: 立命館大学 朱雀キャンパス
- ・本報告で扱う発表: 午後の部 4 発表、うち田形周造氏の「カス型動詞派生の地域差と用法の多様性 —井川・女川における臨地調査を中心に—」が主。

「カス型動詞派生の地域差と用法の多様性 —井川・女川における臨地調査を中心に—」

(東北大学大学院生 田形周造氏)

観察対象: 日本国内の諸方言における、動詞につく接尾辞「-カス (※)」をもつカス型動詞。

※散らかす tir-akas-u の-akas など。-(a)rakas, -(a)rakas, -(i)karakas など含む。

- 目的:**
- (i) 派生パターン (※派生元動詞の有/無対・自/他の傾向) の地域差を見る。
 - (ii) 「意図性」について検討する。「意図性」以外の観点も模索する。

先行研究: ○青木 (1997) 中古・中世語におけるカス型動詞は有対自動詞からの派生が最も多い。有対動詞・他動詞から派生するカス型動詞は、「特殊の色調」を担う。無対自動詞から派生するカス型動詞は、対になる他動詞の役割を担う。

○山田 (1976) 名古屋市方言のカス型動詞は無対自動詞からの派生がほとんど。「非意図の強調」。

○坂本 (2002) 津軽方言のカス (ガス) 型動詞は無対自動詞からの派生がほとんど。「意図的」。

○駒走 (2017) 18 世紀の薩隅方言のカス型動詞は大半が有対動詞から。「意図性が強調される」。

○杉崎 (2021) 岐阜県大垣市赤坂方言のカス型動詞には「無意図の強調」が確認できる。

調査方法: (i) ←『日本方言大辞典』の目視調査。

- (ii) ←宮城県牡鹿郡女川町・静岡県葵区井川への臨地調査 (使用語彙の確認、および作例を用いた容認性判断)

調査結果 1: 表 1: 各地域におけるカス型動詞の派生傾向

	無対自動詞	有対動詞	無対他動詞	異なり語数
東北地方	19 (59.4%)	5 (15.6%)	8 (25.0%)	32 (100%)
九州地方	11 (33.3%)	13 (39.4%)	9 (27.3%)	33 (100%)
中部地方	30 (27.2%)	34 (30.9%)	46 (41.8%)	110 (100%)

(田形 2026: 34)

「九州は中古・中世と似た傾向」、「東北は格増加メイン」、「九州・中部は「特殊の色調」付与メイン」か？

調査結果 2-1 (宮城県牡鹿郡女川町): 60~80 代・男性 2 名/女性 4 名の協力に基づく。

表 2 女川の対象語彙

対象語彙	派生元の対応	意味	1F	2M	3M	4F	5F	6F
わねがす(wane-ru)	無対自動詞	はやしてる、 はずかしがらせる	×	○	—	×	×	×
ひからがす(hikar-u)	無対自動詞	光るようにする	○	○	—	×	○	×
		誇示する	×	△	—	×	○	△
かれらがす(karer-u)	有対自動詞	枯らす	×	○	○	△	△	△
こげらかす(koge-ru)	有対自動詞	焦がす	○	○	△	×	○	○
ねしえるがす(nesye-ru)	無対他動詞	幼児に添い寝して 寝かしつける	○	○	—	△	×	×
うっちゃらがす(utqyar-u)	無対他動詞	ほったらかす	×	○	—	×	○	×
わねらかす(?)	?	仲間はずれにする	×	○	—	△	△	△

(田形 2026: 35)

- (1) a. 皿がひかる。
 b. 一郎が皿をひからがす。→無対自動詞「ひかる」から格増加
 (2) こがしたんじゃないくて、こげらかしたんだ。→有対自動詞から「意図」強調
 (3) からしたんじゃないくて、かれらがしたんだ。→有対自動詞から「非意図」強調
 (田形 2026: 36、斜字部は主張内容をもとに報告者補足)

田形氏は(2)「こげらかす」について、「焦がす」にあたり、-rakas が「意図性を意図的な方向へ強調する」とし、また(3)「かれらがす」について「枯らす」にあたり、-ragas が「意図性を非意図的な方向へ強調する」と説明している。この両方向への作用は、「-カス」の格増加の機能に依拠するという。これを用いて主格と対格の存在が想定される文にすることによって「意図性」を、あるいは共通語の使役形にもあるような「責任の使役」(「××を死なせた」など)的な意味が生じてここから「非意図性」を強調するのではないかと主張する。

以下の 8 ポイント箇条書きは報告者の感想である。

- 選定された各「対象語彙」を形態素分析し、当該の接尾辞と思しき部分だけ抽出すると、上から -gas, -agas, -ragas, -rakas, -rugas, -agas, -(r)akas となるか。r は挿入されたり脱落したりするものだろうか、いずれにしても単一の生産的な接尾辞による派生とは思えぬほど不規則である(実際にはやあまり生産性はないのだろう)。固着化した表現として使われてきたなら、形の中に「-カス」が残っていたとしても、成立時にあった本来「-カス」が持つ意味・機能も十全に残っているとは限らないのではないだろうか。
- 「意図性」「非意図性」両方向への強調について。むしろ「非能格性」による説明はできないだろうか。主格と対格を持つ構造となるから〜、と説明されていたが、(2)(3)の例文などは「何を」にあたる補語を入れたら蛇足だろう。むしろ「程度を意図的にコントロールできる(はずの)主体」が動作主であることが強調されるのではないかと。東北・中部には、「-サル」という形式を持つ方言があり、こちらは「非対格性」による説明がしっくりくる(ものもある)。報告者の研究対象である山梨県国中地域方言には、「-サル」「-カス」どちらもある。「洗濯ものが吊るさる(吊られている、吊ってある)」「あのぼこ、つんむらかしと一だよ(おもらしたんだよ)」。

調査結果 2-2 (静岡県葵区井川) : 80代・女性3名の協力に基づく。

表3 井川の対象語彙

対象語彙	派生元の対応	意味	7F	8F	9F
ぐらかす(gure-ru)	無対自動詞	くじく。	○	○	○
こじくらかす (kujukure-ru)	無対自動詞	話や事態を悪い方へねじって もつれさせる。こじらせる。 病気をこじらせて悪くする。	○	○	○
もぐらかす(mogur-u)	無対自動詞	頭をつかんで 水の中に突っ込む。	△	△	△
ころばかす(korob-u)	無対自動詞	転倒させる。転がす。倒す。	×	×	×
まーかす(ma-u)	無対自動詞	舞い飛ばす。舞わせる。	×	△	×
とばかす(tob-u)	無対自動詞	急いで走る。一生懸命走る。	×	△	×
とびからかす(tob-u)		疾走する。	×	△	×
のたくらかす(notar-u)	無対自動詞	腹ばいになる。はう。	×	×	×
しゃれからかす(syare-ru)	無対自動詞	おめかしをする。	×	△	×
たらかす(tare-ru)	有対自動詞	垂らす。	×	×	×
はならかす(hanare-ru)	有対自動詞	離す。	○	○	△
はなれかす(hanare-ru)			△	△	△
まわらかす(mawar-u)	有対自動詞	回らせる。回転させる。	○	○	○
ほめからかす(home-ru)	無対他動詞	しきりに褒める。褒めちぎる。	○	○	○
つつからかす(tuk-u)	無対他動詞	ひどく突く。突きまくる。	△	△	×
		押し倒す。突き飛ばす。	△	△	×
おしからかす(os-u)	無対他動詞	強く押す。押し倒す。	△	△	△
へしからかす(hes-u)	無対他動詞	押さえる。	△	×	△
ぬりからかす(nur-u)	無対他動詞	盛んに塗る。厚化粧する。	△	△	△
けっからかす(ker-u)	無対他動詞	蹴る。	△	△	△
ふんがらかす(fum-u)	無対他動詞	足で踏みにじる。踏み散らす。	×	△	×

(田形 2026: 37)

- (4) a. 足がぐれた。
b. 一郎が足をぐらかした。 → 無対自動詞「ぐれる」から格増加
- (5) a. 先生が一郎と花子をはならかす。
b. とある事情が一郎と花子をはならかす。 → 「自動詞+使役」に似た間接性付与
- (6) a. 一郎がコマをまわらかす。
b. 一郎がコマを思いっきりまわらかす。 → 働きかけの強調
c. *一郎がコマをそっとまわらかす。 → 結果性の含意か
- (7) a. 一郎が花子をほめからかす。
b. ??一郎が花子を盛んにほめからかす。 → 杉浦 (2021) 「徹底 (～しまくる)」 + 「盛んに」 余剰
c. ほめたんじゃなくて、ほめからかしたんだ。 → 行き過ぎる動作ゆえ「マイナス評価」

(田形 2026: 36、斜字部は発表内容をもとに報告者補足)

田形氏は(5)について、他動詞「はなす」は直接的な対象への干渉を示すのに対し、「はならかす」は自動詞+使役形「はなれさせる」に相当し、働きかけの間接性が見いだせると説明している。(6)「まわらかす」について、他動詞「まわす」と異なり、「そっと」とは共起できずに「思いっきり」とだけ共起できる点から、-akasに「働きかけの「強調」および「結果性の付与」を認めうるかもしれないとしている。(7)「ほめからかす」は「しきりに褒める、褒めちぎる」という意味だとし、すでに程度の強さが内在しているため「盛大に」と共起できないのだとしている(7b)。また(7c)について「ただ相手を持ち上げただけ」「意図的に揶揄する」なら使える、との話者のコメントから、行き過ぎる動作ゆえに「マイナス評価」を伴う場合もあると分析している。

以下の8ポイント箇条書きは報告者の感想である。

- 大きく-(r)akas / rekas系と -(i)karakas / kurakas系があるか。後者はさらに、-(i)kar/kurという形態素も抽出可能？
- (5)について、むしろ「はなれさせる」と「はならかす」の違いが重要ではないか(それともこの方言には使役の-(s)aserがなくて代わりにすべて-(r)akasで表すのだろうか)。たとえばカス型のほうは、話者の認識としてその動作者のせい・責任・過失だなどと思っているとか。共通語の「やる」に対する「やらかす」も、「何を」よりその動作主への責任性を問うことに主眼がある、と示すときに選択される表現であるように思える。
- (6)「*そっとまわらかした」について。カスの持つ結果性の含意による容認不可か、とあるが「コマはそっとじゃ回らないよ」といってその理由だけで「言えない」とする話者は多そうな気がする。
- (6)(7)について。(6)では「カス型動詞に強調の意味があるから、程度を強める副詞と共起することができる」と説明され、一方(7)では「カス型動詞にすでに強調の意味があるから、程度を強める副詞と共起することはできない」と説明されているように受け取れる。動作の程度や意図性の強調、という観点からの分析はあまり有効ではないのではないか。

まとめ: (i) 東北地方は無対自動詞から、中部地方は無対他動詞から、九州地方は有対動詞からの派生が多い。東北・中部は中古・中央語とは異なる方言独自の発展をとげたのではないか。

(ii) 「-カス」の格増加という構造上の変化に伴って、「意図性」や「間接性」などの意味が生じている。

参考文献:

- 青木博史(1997)「カス型動詞の派生」『国語学』188: 40-55.
 駒走昭二(2017)「ゴンザ資料におけるカス型動詞」『日本語の研究』13-4: 141-176.
 坂本幸博(2002)「津軽方言のカス(ガス)型動詞」『日本文芸研究』54-1: 1-22.
 杉崎好洋(2021)『岐阜県大垣市赤坂方言の記述的研究』愛知: 三恵社.
 山田達也(2001)「名古屋方言における「ラカス」派生動詞の形態的分析」『名古屋・方言研究会会報』18: 1-9.

報告に用いた資料:

- 田形周造(2026)「カス型動詞派生の地域差と用法の多様性 ―井川・女川における臨地調査を中心に―」『日本方言研究会 第122回研究発表会 発表原稿集』33-40.

「上方古典落語に使用されている打消しの助動詞の特徴—マクラ部と本題部を比較する—」

(関西外国語大学 安井寿枝氏)

- 目的:** (i) 上方古典落語資料内における打消しの助動詞について、語用論的・統語論的な特徴を明らかにする。
(ii) 落語におけるマクラ部と本題部の差異を明らかにする。
- 方法:** 1995～2001 年上演の音声落語 7 本、1939 年、1940 年収録の速記本を資料とし、出現する打消しの助動詞の種類と接続の傾向を見る。
- 結果:** (i) ン/ズ/ヘン/へ/エヘン/エへ/イデ/ナイ/マイ/ナンダ/ンカッタ/エヘンカッタ/ナカッタが確認され、マクラ部か本題部かで分布や接続の傾向が異なることが分かった。
(ii) **マクラ部:** 本題部に比べると新しい方言形が出やすい。自然談話に比べると古い方言形が出る。**本題部:** ズ/へ/ナンダなどが「形式化(必ず言う台詞は固定的な表現になる)」されており、古い形式が残る。共通語や文語的形式が、人物の特徴を表す表現として使用されている。
- 課題:** 役割語やスタイル差がどのように影響しているのか
「形式化」という用語の妥当性検討

「静岡方言の過去表現「ケ」の使用・理解 —性差・年代差・地域差から」

(静岡理工科大学 谷口ジョイ氏・柴田希隆氏・山岸祐己氏)

- 目的:** 静岡方言における過去を表す「ケ」という形式の各用法について、その使用・理解の実態を話者の性別・年代・出身地域ごとに見る。
- 方法:** 「過去」「詠嘆」「回想」など各用法の使用・理解の可否を問う 15 項目、および性別・生年・出身地域の回答を求めるアンケート。質問紙、またはウェブフォーム (Google Forms)。母方言話者 1482 名から有効回答あり。
- 結果:** 「ケ」の使用パターンを規定する最も主な要因は出身地域であり、県内を西部・中部・東部に分けたとき、中部で最も使用・理解されていることが分かった。
- 課題:** 意味・用法の実態把握
形態・統語的分析

「意味拡張と言語接触から見る「トル」

(甲南女子大学 鴨井修平氏)

報告者によるまとめ: 西日本諸方言には、「ヨル」(進行)と「トル」(結果)による形式的なアスペクト対立があるが、主に若年層において「トル」が進行をも表すようになる「トルへの一本化」が進行中といわれている。工藤(2014 など)によれば、これは「結果」から「進行」への意味拡張による現象と説明されている。実際、高知県土佐方言、大分県佐伯市方言などごく少数を除いて、ほとんどの地域において進行「トル」の使用が見られるようになっている。同じアスペクトに複数の形式が併存していることになるが、これらは自由変異でなく、「配慮」「ぞんざい」など待遇の差異化に用いられているケースが散見される(山口県山口市方言など)。存在動詞アル語源のアスペクト形式を持つ和歌山県紀南方言や三重県牟婁方言にも「トル」や「テル」が流入し、待遇の差異化に用いられている。伝統方言らしくない形式を使うことによって、フォーマル⇄カジュアルの発話スタイルを使い分けている可能性がある。この事実から、「トル」の隆盛は従来言われてきた意味拡張のような内的な要因によるものだけでなく、言語接触のような外的な要因もあって西日本全体に広がっているのではないかと予想を立てることができる。

工藤真由美(2014)『現代日本語ムード・テンス・アスペクト論』東京: ひつじ書房。